中央農試技術普及部 H13.2.27

おうとう整枝せん定上の留意点

目的	1 商品性の高い果実を生産する樹づくり 2 作業性が良い樹（特に収穫）づくり 3 防除効率が良い樹づくり	☆十分日光が当たりしかも作業性が良い枝の配置 ☆適正な樹勢管理・低樹高

1 おうとう樹の特性と結果習性

(1) 樹の特性

ア 頂部優勢性が強く、枝先から3～4本強い枝が発生する。
（「車枝」や同年枝の「とも枝」になりやすい）

イ 耐陰性が弱い。（日当たりが悪いと生長や花芽着生が劣る）

ウ 開花・結実から成熟までの期間が短い。
（当年の収穫果実は貯蔵養分に大きく依存）

エ 頂芽（先端部の芽）は必ず「葉芽」。（頂芽から真っ直ぐ枝が伸びる）

オ 「切り口」の癒合が悪い。（枯れこみやすい）

(2) 結果習性

ア 「花芽」は前年伸びた枝の腋芽に着生。
中・長果枝は基部の4～6芽程度が花芽、それより上の芽は葉芽。
花束状短果枝は頂芽が葉芽で、他は花芽。

イ 「花芽」は純正花芽。開花・結実後はその部分は盲芽となる。
（中・長果枝を短裁した場合、花芽だけのところで切ると結実後は、
その部分は枯れ上がる）

樹の特性と結果習性を理解し、それを利用・駆使するのが整枝せん定

2 樹勢管理」に関する留意点　（ここでは、整枝せん定に係る事項のみ記載）

＜商品性の高い果実を生産する樹勢は 中～やや強め」が適当＞

(1) 若木時代 全体に樹勢は強い）→樹勢管理は 樹勢を落ち着かせる」
あるいは 樹勢を強めない」ような処置が基本。
　　＊弱せん定、間引き主体、枝の誘引、夏期せん定の併用など。

(2) 成木時代 全体に樹勢は弱くなる）→樹勢管理は 樹勢を強めにする」
あるいは 樹勢が弱くならない」ような処置が基本。
＊ 切り詰め」の併用、 立ち枝」の利用など

3 枝量と樹 枝）の太り＜枝量 葉の量）が多い方が太る＞

(1)太らせたい場合→ア枝量 葉の量）を多くおく 葉芽を多く残す）
イ枝を 直立」させ、伸長を旺盛にさせる

(2)太らせたくない場合→ア枝量 葉の量）を少なくする 葉芽を少なくする）
イ枝を 下方」に誘引し生長を抑制する

4 整枝上に関する事項→ 車枝」・横枝」を避ける理由

(1) 車枝」→ 厚みのある樹冠拡大」が難しい。
 車枝」部の下と上の太さの差が大きくついてしまう。

(2) 横枝」→ 日陰げ」を作りやすい。 本筋の枝」と競合しやすい。

5 整枝せん定」の処理と反応

(1) 枝の切りつめ」

 芯の部分］

 ア 幼木時代の 芯」を切りつめた場合、切りつめ部位から15～ 20cm 程度下に強い新梢が発生する。

イ主幹から発生する枝の 間延びを防ぎたい」場合や 主枝候補枝」として強い枝を求めたい場合には有効。

ウ コルト台南陽」などでは、切除部位から発生する枝が強すぎて利用出来ないことがある。
 （その場合には、発生した強すぎる枝を切除して出し直す方法もある）

 側枝の先端部分］

ア 側枝」の切りつめは、 芯」部位と同様に切りつめた部位から強い新梢が発生する。

イ 切りつめた場合、 芽」の方向に枝は伸長するため曲がる。

ウ 側枝の「間延び」を防ぎたい場合には有効。

(2) 「枝の間引き」（先端部の「芯」となる枝に競合する枝の間引き）

ア 「芯」部分は、競合枝を間引かない場合よりも強くのびる。

イ 競合枝よりも下部位の小枝は伸長しやすい。

ウ 「車枝」「とも枝」を回避したい場合は、勢力差をつけたい場合には有効。

６「5～7年生程度」で主枝候補枝の間引きが必要になった樹の留意点

(1) 将来の目標樹形を想定して、残すべき主枝候補枝の目安をつける。この場合、
枝の配置に特に留意する。
（主枝候補枝の素質、日当たり、作業性、防除薬剤の通りなどから）

(2) それを決めたら、残す枝に日陰げを作る枝、近い枝を優先して処置する。
（基部から切除してしまうか、成り枝として暫く利用するかは状況で判断する）
＊将来の目標樹形（例えば3本主枝とか4本主枝とか）を決めても、すぐにその本数にするのではなく、悪影響がでない場合には、成り枝として利用していくのが基本）

７ 今年のせん定作業に当たって

(1)凍害の対応→今年、各地で花芽や枝の凍害が認められている。
せん定作業の前に凍害の程度を確認する。
凍害がひどい場合は、せん定時期を遅らせるとともに、最小限の大枝抜き程度とし、小枝の整理は控えるようにする。

(2) 「切り口」には「その日のうちに」癒合剤を塗布する。